着鎧甲冑ヒルフェマン

オリーブドラブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
着鎧甲冑ヒルフェマン

【Ｎコード】
Ｎ４８６５Ｚ

【作者名】
オリーブドラブ

【あらすじ】
高校受験を来年に控えた中学三年生・一煉寺龍太は、近所迷惑なお隣りさんに苦情を言うべく突撃を敢行する。そこで見たものは、町で噂のスーパーヒロインに変身していた――すっぽんぽんの女の子！？　変態のレッテルを貼られてしまった龍太は、果たして名誉を挽回できるのか！？　そして、彼女が変身するヒロインの姿は一体ッ！？　ついでに、彼女のスリーサイズは一体……あ、石とか投げないで。

事の始まり

「松霧町商店街で火災発生！　『救済の先駆者』出動じゃ！」

湯煙に包まれた空間の中で、老人の叫び声が響き渡る。

しかし、そこに声の主はいない。要するに、何らかの通信機越しに発せられた声なのだ。

その発信源を取り付けたブレスレットを右腕に嵌めた、一人の少女。

彼女は老人の声を聞き取ると、凛とした瞳を鋭く細め、浸かっていた湯舟から身を乗り出す。一糸纏わぬその姿は、さながら人間に生まれ変わったばかりの天女のようだ。なめらかな曲線を描くその身体は、ある種の神秘ささえ感じさせる。

だが、その目付きにだけは「天女」と呼べるような優雅な印象はない。あるのは、「いざ死地に赴かん」といわんばかりの決意の色だ。

「わかったわ、おじいちゃん……着鎧甲冑ッ！」

例の老人と機械を通じて言葉を交わすと、彼女は呪文を唱えるかのようにブレスレットに叫ぶ。

刹那、彼女のみずみずしい肢体は機械の腕輪から飛び出す光に絡み付かれてしまう。その輝きは少女の全身を覆うように広がって行き、やがて光はある形状に固形化していった。

彼女の美しい身体のラインを完璧なまでに維持した、緑と黒を基調としたボディスーツ。さらに、きめ細かく整った目鼻立ちが特徴の麗しい顔を包み込む、フルフェイスマスク。その口元には、唇を

あしらったデザインが施されている。
さながら昔の特撮ヒーローのような、シンプルなそのスーツを一瞬にして身につけた彼女は、風呂場の窓を開けると一切の迷いを感じさせない動きでそこから飛び出していった。

夜の町を暗黒にさせまいと光る、月光や電灯の輝き。それらの他にもう一つ、今宵の景色を明るくさせる光があった。
商店街の一角にある、小さな中華料理店。そこで発生した火事の勢いが、この日の夜を騒然たる状態に叩き込んでいたのだ。
「あそこね……！　おじいちゃん、被害に遭った人は！？」
『今のところは怪我人の類はいないみたいじゃの。――じゃが、火事が起きた店の上の階に逃げ遅れた子供がおるぞ！』
「わかったわ！」
スーツを纏ってからもしっかり装着されているブレスレットを通して、老人が状況を説明する。彼の指示に従って動いている少女は、人間とは思えないような速度でアスファルトを駆け抜けていく。

既に現場では消防隊が駆け付けていたが、火の勢いが思いの外激しく、老人の言っていた「逃げ遅れた子供」がいる階まで辿り着けない事態に陥っていた。梯子車で十分届く距離ではあるのだが、なにぶん煙や炎が強烈で、突入はおろか、近寄ることさえ難しい。放水は既に開始しているのだが、火災が止まる気配は見られなかった。

そこへ颯爽と駆け付けたのが、例の少女――が扮する、謎のヒロインだ。

彼女は自分の登場に驚く人々を尻目に、猛烈な火災に包まれた中華料理店に真っ向から突撃した。
真っ赤な炎に蹂躙された建物を突き進み、灼熱をものともしない。

今の彼女は、まさしく勇敢なヒロインそのものといった出で立ちであった。
「消防隊が鎮火を始めてるのに、勢いが全然止まらない……きっと、食用の油に引火してるのね」
冷静に物事を分析しつつ、身を焦がさんと暴れ回る火炎をかい潜り、彼女は階段を駆け上がっていく。

例え瓦礫が落ちてきてもパンチ一発で迎撃し、火に包まれても手刀一つで振り払い、足場が崩れても人間離れしたジャンプで危機を脱する。
そんな彼女の快進撃を阻む障害は、ありえなかったらしい。

やがて到達した目的の階層で、例の子供を見つけた時も……彼女は無傷であるばかりか、息一つ切らしていなかった。
そして少女は無事に子供を救出し、固唾を飲んで見守っていた人々の拍手喝采を背に、夜の闇へと姿をくらました。

全身を謎に包めた、無敵のヒロイン――その存在は、この活躍を通して人々の間に「より」浸透していくことになる。

そんな彼女が満足げに帰宅した頃には、既に時刻は夜の十時を回っていた。クリスマスが近いこの季節に、この時間帯はかなり冷え込む。
自宅の一軒家を前にした少女は、周囲に目撃者がいないことを確認するべく、辺りを見渡す。そして誰もいないことを確かめると、素早く家に入れるようにと開けておいた窓から、速やかに帰宅する。

窓で出入りするのはよろしくないことだと知っていたが、それでも正体がばれる可能性を最小限に抑える努力を怠るわけにはいかない――というのが彼女の言い分だ。

馬鹿正直に玄関から行き来していたのでは、いつ通行人に見つかって自分の素性が露呈してもおかしくない。それを思えば、多少はしたないことではあっても、窓からコソコソ出入りした方がまだマシ、ということなのだ。

そういう事情から、彼女は窓から忍び込む格好で二階の自室に入っていく。そしてサッと窓とカーテンを閉め、辺りをキョロキョロと見回す。

この場に誰もいないのは当たり前で、同居している彼女の祖父――すなわちさっきまで彼女と話していた老人も、今は一階のリビングでニュースを見ている頃だ。

それなのにここまで彼女が気を張っているのは――スーツの下が全裸だからだ。

人命救助という自身の使命を果たした以上、これ以上このスーツを纏う意味はない。無駄にスーツの力を使わない、と決めているからには、帰宅すればすぐにそれを解除するのが筋だ。少なくとも、本人はそう捉えている。

だが、今の彼女は風呂場から咄嗟にスーツを着用して飛び出してきたため、その下にはブラジャーやパンティーすらない。この摩訶不思議なスーツを使っての人命救助活動は、彼女と彼女の祖父がこの町に来た頃から続けてきたことであるが、下着も穿かずに出動したケースは今回が初めてなのだ。

いつもなら下に普通の服を着ているから、すぐさまスーツを解除できているはずなのに、今回ばかりはそれがままならない。それもそのはず、彼女はまだ十五歳の思春期真っ盛りなのだから。

――それでも、彼女は自分の決めたことを曲げたくはなかった。そんな頑固なまでの真っ直ぐさは、彼女の取り柄でもあり、欠点であるとも言える。

故に彼女はその場でスーツを解除し、自室のタオルで身体を巻いてから風呂場に戻ることに決めた。脱衣所には着替えを置いてあったので、取りに行かなければならないのである。

しかし、その判断はこの時の彼女にとって、最大のミスを招く結果となる。同時に、この物語の起点にも繋がるのだ。

まず、ブレスレットに「着鎧解除（ちゃくがいかいじょ）」と囁く。すると、それに呼応したかのように輝くスーツが、光の幕と化してブレスレットの中に収縮していった。

その光が収まる頃には、彼女は風呂場にいた時と同じ、白い肌をさらけ出した美しい裸身となっていた。すぐさま頬を赤らめ、慌ててタオルを取ろうとタンスに手を伸ばす彼女。

――だが、その手は目的の物を掴む瞬間に、ピタリと止まって動かなくなってしまう。

気配を、感じたからだ。

その出所の方向を、恐る恐る振り向いた彼女。その視界に、非情（？）な現実が突き刺さる。

――彼女と同世代くらいの男の子が、呆然と立ち尽くしていたのだ。

……そう、彼女がスーツを収め、艶やかな肢体をさらしている、この光景を前にして。

こんなボーイ・ミーツ・ガールは嫌だ

少年の名は、一煉寺龍太。

高校受験本番を来年に控えた、中学三年生である。そんな彼が、自宅の隣にある一軒家のリビングで正座させられているのには、それなりの事情というものがあった。

二学期がもうすぐ終わる、という時期に隣に引っ越してきた救芽井家。その家から度々発せられる激しい光が眩しい余り、隣に住む彼は冬休みに入った今でも受験勉強に集中できない、という苦境に苛まれていたのだ。

龍太や救芽井家が暮らしている、この松霧町には密集した住宅地が多い。それだけに、救芽井家の出す光を迷惑がっている住民は決して少なくはないのである。特に、隣に住んでいる上に受験が懸かっている龍太のストレスは大きいだろう。

そんな彼が、苦情を訴えるべく救芽井家に足を運ぶことは不思議なことではないのかもしれない。

救芽井家もそういった反響は覚悟していたらしく、一家の長だという六十三歳の老人・救芽井稟吾郎丸は、何度も苦言を呈する龍太を懸命になだめていた。

彼の温和な人柄が功を奏してか、龍太も「近所のこともたまには考えてくださいよ！」と言う程度であり深くは追及してこなかった。しかし、それにも限界がある。

何度文句を言っても光の勢いは止まらず、そればかりか日を追うごとに光が出る回数が増えていく現状に、血気盛んな中学生はとうとう腹に据えかねたのだ。

怒り心頭の龍太は稟吾郎丸の制止を振り切り、光の出所である部

屋――すなわち、稟吾郎丸の孫娘・救芽井樋稟（きゅうめいひりん）の部屋に突撃したのだ。例の光を止めてほしいと、直訴するために。

そこで見てしまったのが、松霧町で噂のスーパーヒロイン――だった、全裸の少女。思春期の男には刺激的過ぎる出会い方をしてしまった龍太は、顔を真っ赤にして悲鳴を上げる樋稟に蹴り倒されてしまったのだ。しなやかな脚から繰り出す回し蹴りを顔面に喰らい、本番を控えた受験生は努力の成果（記憶）が飛びかねないほどの衝撃を受けることとなった。

事情はともあれ、人の家に押し入って少女の裸を見てしまったことは事実。その償いはあって然るべきという方針に従い、龍太は今、稟吾郎丸と樋稟の前で正座を強制されている……という次第であった。

「そそ、そりゃあ受験なんだから大変だっていうのはわかるし、悪いとは思うけど……だからって手段は選ぶべきでしょ？　変態君！」

「ちょ、変態とはいくらなんでも失敬な！　俺には一煉寺龍太という名前がちゃんとあってだな！　――それに、俺だって予想外の展開だったんだぞ！」

「で、でも見たじゃない！　エッチ！　スケッチ！　ワンダーランドっ！」

「なんだよその夢の国！？　エッチなワンダーランドって――ちょっと行ってみたいんですけど！」

微妙に話が脱線しようとしていた。

「まぁしかし、こんな形で外部の人間に知られてしまうとはのぅ」

そんな二人の平行線（？）な会話を見兼ねてか、稟吾郎丸が口を挟む。ちなみに彼はその人柄と名前の長さから、龍太に「ゴロマルさん」の愛称で呼ばれている。

「そう、それ……。救芽井が変身してたあの姿。あれって、最近町で噂になってるスーパーヒロインだよな？　まさか本物に出くわすことになるとは思わなかったよ」
「く、くうっ……。まさかよりによって、初対面で裸を覗くような変態君に正体を知られるなんてぇ……」
　勝手に付けられた不名誉なあだ名に、龍太は思わず眉毛を吊り上げた。
「だから、その呼び方勘弁してくれよ！　事故なんだってば！」
「なにがどう事故なのよぉー！　思いっ切り私の身体見てたじゃないっ！　まだ十五なのに、お嫁に行けなくなったらどう責任取るっていうのっ！？」
　とうとう顔を両手で覆い、泣き崩れてしまう樋稟。女に泣かれてしまっては、龍太としては手も足もでない。
「うう……頼むよもう、堪忍してくれよ……」

　助けを求める彼は、樋稟の横にいる稟吾郎丸に縋るような視線を送る。
　しかし、龍太の腰程度の身長しかないほどの小柄で、サンタのようなボリュームたっぷりの白髭が特徴の老人は、無言で「お手上げ」を主張するだけだった。
「さっき話したとは思うが、わしらは着鎧甲冑の技術漏洩を防ぐためにこの町に来たのじゃ」
「あ、ああそう！　それそれっ！　あんた達が作ったメカを兵器にしようとする奴がいて、そいつがこの町にいるんだったっけ？」
　せめてもの助け舟として、稟吾郎丸は別の話題を振る。これ幸いと話に乗っかる龍太は、彼らから素性を聞かされていた。あらゆるトラブルや火事に颯爽と駆け付け、人々を救う噂のスーパーヒロイン――その正体を見られた以上、ごまかすことはできないからだ。

着鎧甲冑（ちゃくがいかっちゅう）――それは、科学者の家系である救芽井家が開発した、最新鋭レスキュースーツの別称である。
かつて地震や火災に苦しめられた経験を持つ樋稟の両親が、「どんな危険な場所であっても、そこで助けを求める人々に手を伸ばせる存在を生み出したい」という願いを込めて、作り出したものなのだという。
着用すれば超人的な身体能力を発揮し、炎も瓦礫も突破してしまう。さらに、エメラルドに輝くブレスレット型ツール「腕輪型着鎧装置（メイルド・アルムバント）」を介して、粒子化されて収納されている着鎧甲冑を瞬間的に装着することもできる。
防火服の耐久力を超え、機動隊のシールドの硬度を凌ぐ。そして、あらゆる状況で迅速に装着できるこのボディスーツは、まさに人命救助という目的のために創出された存在だと言える。
そして、その第一号は「救済の先駆者（ヒルフェマン）」の名を与えられたのだった。

「はぁ……じゃあやっぱり、武器とか必殺技とかないんだな」
「あるわけないでしょ！」
「速射破壊銃とか」
「何に使うの！？」
「ロケットパンチとか」
「私の腕が吹っ飛ぶわよ！？」
「おっぱいミサイルとか！」
「――死にたいの？」
「――サーセン」

……しかし、その技術を救助活動のみに使うことを許さない者がいた。着鎧甲冑のテクノロジーの兵器転用を狙う者が現れたのだ。
その名は古我知剣一（こがちけんいち）。かつて樋稟の両親と共に着鎧甲冑の開発に

携わっていた青年科学者である。彼は着鎧甲冑の技術を兵器として運用すれば、紛争が絶えない世界各地に救芽井家の技術力を知らしめることができると訴えた。

無論、着鎧甲冑の本来のコンセプトから外れたその意見は許されず、ほどなくして彼はクビになってしまった。救芽井家の利益を視野に入れての発言であったにもかかわらず、開発計画から外されてしまった彼は「報復」を決意。

樋稟の両親を誘拐して松霧町に逃亡し、自らが開発した自律機動兵器を使っての「着鎧甲冑の技術奪取」を目論んだのだ。彼自身を司令塔とした、その機動兵器の集団は「技術の解放（リベレイション）を望む者達」と樋稟達に呼ばれている。

その上、古我知は開発計画に参加していた頃から密かに入手していた、着鎧甲冑の設計図を元手に「呪詛（フルーフマン）の伝導者」を開発していた。「着鎧甲冑」の事実上の第二号にして、初の兵器転用を実現させた「凶器」である。

彼はそれを用いて、第一号の「救済の先駆者」を破壊して樋稟と稟吾郎丸を捕らえ、「『救芽井家』の生み出した『着鎧甲冑』の痕跡」を消し去り、自らが第一人者の座に取って代わるつもりなのだ。

両親を誘拐された樋稟は稟吾郎丸と共に古我知を追い、住み慣れた研究所を離れて松霧町に身を置いた。かけがえのない家族を救い、守るべき人命を傷つけんとする「呪詛の伝導者」を処分するために。

「……そのために、人命救助に勤しみつつ古我知って人を探してるってわけか。苦労してんなぁ」

「お、驚かないの？　ていうか、あっさりと信じるのね……」

「まぁ、あんなものを直に見せられたら納得するしかないだろ。――それにさっきのアレで、もうビックリするのが飽きるくらいビックリしたしな」

敢えて目を逸らして、龍太はぽつりと呟く。その言葉の意味に感

づいた樋稟はさらに顔を真っ赤に染めて、抱きしめるように両腕で発育のいい胸を隠した。
「や、や、やっぱり！　変態君はやっぱり変態君だったのね！」
「だーかーら！　事故だって言ってるだろう！　勘弁してちょーだいよ！　ゴロマルさんからもなんとか言ってくんない！？」
「あいにくじゃが、専門外じゃ」
素っ気ない返答に、龍太は頭を抱えてツーブロックの黒髪を掻きむしる。世間一般の目で見れば「中の下」と判断されるであろう彼の顔は、困惑と焦燥の色に染まりきっていた。
しかし、焦っているのは樋稟も同じである。

彼女の両親は着鎧甲冑を造り出した天才中の天才であるが、彼女自身もまた、十二歳で海外の大学を卒業する程の才女なのだ。
故にその才能を評価されていた彼女は昨年から両親の助手を務め、着鎧甲冑の開発計画を手伝っていた。そんな人生だったからか、彼女には同世代の友人がいない。箱入り娘であったために、男の子など以っての外だった。
そんな樋稟としては初めての「『同世代の男の子』との出会い」……だったのだが。いかんせん運が悪すぎた。
面識のない赤の他人である少年にいきなり裸を見られた彼女は、ひどく動転してしまってすっかり彼を警戒してしまっている。
龍太としても容姿故に女の子と絡んだ経験がほとんどないために、樋稟との出会い方やその後の展開には動揺するしかない……のだが、彼女の場合はそれを大きく凌いでいた。

「とにかく！　口外は絶対にしないこと！　いいわね、変態君！」
「わかってるよ。あと、変態じゃないって！」
「いいえ、お父様は言ってたわ！　『心を通わせずに裸を見ようとする男共はみな変態だ』って！」
「じゃあ心を通わせるためにも俺の言い分を聞いてくれー！」

いくら説得しても変態呼ばわりを止めない樋稟に、頭を悩ませる龍太。

――その時だった。

「まったく……ん？」

ふと、彼はリビングのカーテンに不自然な人影がゆらめいていることに気づく。

首や手足がぎこちなくうごめく、そのシルエットに龍太はえもいわれぬ不気味さを感じた。

「なんだ……？　ゴロマルさんと救芽井の他に、誰かいるのか」

「なに言ってるの？　この家には私とおじいちゃんしかいな――」

そこまで言いかけた彼女が龍太の見ている方向に視線を移した時。

絶世の美少女は、焦燥に顔を引き攣らせた。

それはシルエットに気づいた稟吾郎丸も同じであり、状況が飲み込めない龍太だけが首を傾げていた。

「な、なんと……！　まさか、こんなところまで挑発に来るとは！」

「くっ！」

樋稟は驚愕の言葉を漏らす稟吾郎丸を一瞥すると、眉を潜めながらカーテンを開けてシルエットの正体を暴いてしまう。

「う、うおわあっ！？」

その正体の異様な風貌に、何事かと正座から立ち上がろうとして

いた龍太は腰を抜かしてひっくり返ってしまった。

「ムンクの叫び」を思わせるような凄まじい形相――を象った鉄仮面に、黒い西洋甲冑で全身を固めたような格好の、人ならざる人。すなわち、例の古我知剣一が擁する自律機動兵器「解放（リベレイダー）の先導者」が現れたのだ。

「『技術の解放を望む者達』……！　いくら夜中だからって……こんな住宅地まで茶々を入れに来るなんて、いい度胸じゃないっ！」
「待つんじゃ樋稟！　今、存在が世間に知れたら困るのは向こうも同じじゃ！　どうせ奴らは襲っては来れん！」
「このまま放ってなんかおけない！　私達の都合で誰かを巻き込まないうちに、早く決着を付けないとっ！」
そそくさと窓の向こうから立ち去っていく「解放の先導者」。樋稟はその機械人形を追って家を飛び出そうとするが、稟吾郎丸は必死に制止する。

というのも、あの逃げた機械人形を追っていけば「呪詛の伝導者」と遭遇する事態は、避けられないはずだからだ。現時点において、救芽井家は兵器としての戦闘能力を持った「呪詛の伝導者」に対抗する術を持っていない。
生身の人間に比べてパワーはあるものの、運動性で着鎧甲冑を使う人間に劣る「解放の先導者」はともかく、戦闘用に特化した「呪詛の伝導者」に接触すれば、たちまち「救済の先駆者」はスクラップにされてしまうだろう。

しかし、それ以上に彼女は自分達が造り出したテクノロジーを巡る抗争に、他人を巻き込む事態を避けたいという気持ちが強かった

のだ。
樋稟は稟吾郎丸の小さな体を振り払い、ショートボブの茶髪を揺らしながら、自宅を飛び出していく。
そして、感覚的に関しても物理的に関しても置いてけぼりを喰らってしまった龍太は――
「た、頼む龍太君！　樋稟を……あの娘を助けてやってくれい！」
「あー……やっぱそういう展開？」
――わけがわからないまま、樋稟を追うように言われてしまっていた。
「……ああもう、なんなんだよ今夜は！　こうなったらあの娘を助けて、変態のレッテルだけでも剥がしてやるっ！」
他所の難しい話は、知識を詰め込もうと必死な受験生にはよくわからない。
それでも、変態扱いされたまま別れることは、仲が悪いまま終わらせることを嫌う彼の性分に反することだった。
龍太は、カーテンが開けられた窓から樋稟が走って行った道を確認すると、愛用の赤いダウンジャケットと黒のフィンガーレスグローブを着用する。
「受験生に面倒事をあてがわないで欲しいね、まったくっ！」
そして両手で頬をパン！　と叩いて気合いを入れ、一人の少女を追って救芽井家を出発していく。

――彼の冬休みの稀少な一時が今、始まろうとしていた。

ひとまず観戦

さてさて……勢いよく飛び出して来ちゃいましたけども。

――目の前で起きてる状況に、俺はどうコメントすりゃいいんだ！？

あの意味不明な機械人形（？）を追って家を飛び出した救芽井の後をつけて、俺は住宅街のはずれにある公園まで来ていた。それなりに雪が降り積もってくれているおかげで、足跡を辿るだけで追いつけたのはラッキーだったんだが――

「たあああッ！」

――眼前で繰り広げられてる乱闘が、とにかく普通じゃなかった。

不気味な格好をした等身大のロボット集団を相手に、パンチやキックをお見舞いしている救芽井――が変身しているであろう、この町で噂のスーパーヒロイン。

「救済の先駆者」なんて名前を持った彼女の立ち回りは、まさしく悪の組織に立ち向かう特撮ヒーローのようだった。事情を知らなければ、ロケにすら見えるだろう。

「やあああッ！」

……いや、そう例えるには気迫がマジ過ぎるか。公園を舞台に喧嘩だなんて、子供の教育によろしくないしなぁ。

救芽井に殴り飛ばされた機械人形は激しく宙を舞い、滑り台やブランコにたたき付けられる。当然、それらの遊具はもれなく木っ端みじんに……おいおい、世間に知られちゃまずいとか言う割りには派手に暴れてんなぁ。

ま、銃器の類をぶっ放されてないだけマシか。「機動兵器」にしちゃあ、武器とかを使ってる気配はないし……。

「世間に知られたら困るのは向こうも同じ」。確かゴロマルさんはそう言っていたはずだ。

……そうか。なら、目撃者である俺が存在をアピールすれば、少なくとも乱闘を中断させることはできるかもしれない。「向こうも同じ」というからには、救芽井側も機械人形側も目撃者がいるとわかれば、引き上げざるを得ないんじゃないか？

「兵器転用だか情報漏洩だか知らないが！　人が暮らしてる町ですき放題やってんじゃ――」

そう思った俺は声を張り上げようとして――吹っ飛ばされてきた機械人形の体を顔面にぶつけられた。

「ブファッ！？」

そのまま後ろにひっくり返った俺は、倒れたまま動かない機械人形の下敷きにされてしまう。うげ、重たい……鉄なんだから当たり前か。

俺に乗っかってる奴は体の端々に火花が飛び散っており、現在進行形で救芽井にボコられてる他の奴らと違って、動き出す気配がない。どうやら機能停止してるみたいだな。

救芽井もロボット集団も俺の存在には気づいていないらしく、一般人の危機ほったらかしのままで戦闘に興じている。ロボット共はともかく、救芽井は人命救助が仕事なんだから助けてくれよ！？

トホホ、まさかここまで嫌われていようとは……。

いや、気づいてないだけってのは分かってるけどね？　初対面が初対面だから傷つくんだよ……。

そんな俺の悲哀をガン無視するかのごとく、救芽井はますます積極的にロボット集団に攻め入っていた。殴られ、蹴られ、投げ飛ばされていくロボット達は、為す術もなくスクラップにされていく。下敷きにされてるせいで、詳しい戦況はなかなか見えづらいのだが。

……まあ、なんだか優勢みたいじゃないか。まだ例の「呪詛の伝導者」ってのは出てこないみたいだけど、これならひょっとして楽勝なんじゃないか？

他人事ではあるけれど、やっぱりお隣りさんが勝ってくれる方が嬉しい。それに、この一件が解決すれば、救芽井が出す変身の発光に悩まされることもなくなるかも知れないんだから。

うーん、それはそれで救芽井家の人と話す切っ掛けがなくなるわけだから、寂しくなりそうな気はしないでもない。おっかない救芽井はともかく、ゴロマルさんは割といい人だからなぁ。あの人、「受験頑張るのじゃぞ」っていろいろ差し入れてくれるし。

「……ん？」

すると、今まで引っ切り無しに響き続けていた乱闘の騒音がピタッと止んでしまった。救芽井が勝ったのか？

やっとの思いで、俺は自分を下敷きにしていた機械人形を押しのけ、目の前の状況を確認する。

「解放の先導者」とかいうロボットは全滅し、その屍の上には救芽井が立っている。そして、彼女の視線の先にはピッチリと黒いスーツを着こなした男の人が立っていた。肩まで掛かった焦げ茶色の髪が、なんだかホストみたいだ。

「おやおや、本当に頑張り屋なんだね。樋稟ちゃん」
「剣一さんッ……！」

公園を舞台に、対峙する美男美女。剣一さん……ってことは、あのイケメンお兄さんが例の「古我知剣一」ってことなのか。てことは一連の事件の黒幕……ってことになるんだろうけど、あんまりそういう風には見えないなぁ。身長が百六十五センチしかない俺が言うのもなんだけど、見るからになよなよしてる感じだし。

――だけど、救芽井の面持ちはかなり深刻って感じがしてる。万引きがバレた悪戯っ子みたいだぞ。
「あーあー、僕のおもちゃを好き勝手に壊してくれちゃって。『解放の先導者』だってタダじゃないんだから、もう少しソフトに扱ってくれないかなぁ」
「ふざけないでください！　ここで会ったが百年目、お父様とお母様を返して頂きます。それに、『解放の先導者』のプラントも必ず摘発します」
「おお、怖い怖い……。そんなこと言われると、抵抗したくなっちゃうなー。僕！」

古我知さんの目付きが、降り積もる雪にも劣らぬ冷たさを見せる。おお……悪い顔してんなぁ。
よく見てみると、あの人の右腕には、救芽井が嵌めてるブレスレットと同じようなものがある。色は黒いけど、形状は全く同じだ。
「腕輪型着鎧装置」……だっけ？
古我知さんは右腕をゆっくりと自分の胸の前に上げ、不敵に笑う。
「着鎧、甲冑」

そして、何かを呟いたかと思えば――あっという間に、その姿が光を帯びて変わってしまった。

真っ黒のメカメカしい鎧で全身が覆われていて、見るからに「強そう」なイメージを与えるフォルム。『救済の先駆者』もそうだけど、こっちもなかなか特撮ヒーローみたいでカッコいいデザインではないか。唇があるマスクなのはどっちも同じみたいだけど。

なんか腰に剣とかピストルとか差さってるし、確かに戦闘用って感じの出で立ちだよな……これが例の「呪詛の伝導者」って奴なのか？

いやぁ、まさか本物の変身ヒーローを間近で見られるなんて思いもしませんでしたよ。悪者なのが惜しまれるが。

――つーか、本当はこんな呑気なこと言っていい状況じゃないんだろうな。俺一人が「蚊帳の外」なだけで。

「剣一さん。申し訳ありませんが、あなたの目論みはおしまいです……！」

「試作品のレスキュースーツで、戦闘用のパワードスーツに挑む――か。樋稟ちゃん、君のギャグセンスならＭ－１が狙えるよ」

冷たい風が吹き渡り、睨み合う両者。

片田舎の小さな町を舞台に、二人の決闘が始まろうとしていた……！

……えーと、俺って何しにここに来てたんだっけ？

これぞKY

公園を舞台にした、無駄に壮大な決闘。
最初に仕掛けたのは、救芽井の方だった。
「はあああああッ！」
地を蹴って駆け出す彼女は矢のように襲い掛かる――けど。

「おお、よく見える見える」
感心するような声を上げる古我知さんに、あっさりと投げ飛ばされてしまった。
「あううっ！？」
巴投げを喰らってブランコにぶつけられる「救済の先駆者」。あぁ、子供達の憩いの場が見るも無残な姿にぃ……。
――それにしても、「見える見える」って……古我知さんは何が見えたっていうんだ？　救芽井のぱんつか？
確かにそれは、この季節にミニスカを履いていた彼女の自己責任だとは思うが、覗きなんて分別のないことをいい大人がするなんて――

「君の対『解放の先導者』用格闘術のデータは全て、この『呪詛の伝導者』にインプットされてるからね。君の動きは僅かなモーションだけでも完璧に見切れるのさ」

――あ、なんか違うっぽい。思ったより真面目なものを見ていたようで、なんだか申し訳ないなぁ。
考えてみれば、そもそも今の救芽井は変身してるんだから、どんなに頑張ったアングルでもぱんつは見えないはずだ。うーん、知らない間に煩悩が渦巻いていたようだ。

そうやって俺が一人で悶々としてる間に、救芽井が起き上がってきた。ブランコの鉄柱の部分にぶつかっていたから、さぞかし痛かっただろうに……。
「やりますね。でも、まだまだこれからです！」
あら。なんだか平気でいらっしゃるみたい。着鎧甲冑ってずいぶん頑丈なんだな……。
「もう諦めたら？　大人しく『救済の先駆者』を捨ててくれれば、怪我させずに済むんだけどなぁ」
「ふざけないでッ！　お父様達の願いを――そんなことのためにッ！」
「やれやれ……強情っ張りなのは親子そっくりだね」
古我知さんはため息混じりに、腰からピストルを引き抜いた。おいおい、こんなところで発砲する気かよ！？

「させないッ！」
ピストルを使わせまいと、救芽井は再び「呪詛の伝導者」に襲い掛かる。心なしか、「銃声を上げられては困る」と慌てているようにも見えた。
「だよね～……僕も使いたくないなッ！」
すると、古我知さんの方も――駆け出したッ！？

「――ッ！？」
銃を撃つのかと思いきや、そのまま突進してきた相手に動揺したのか、救芽井はピタッと動きを止めてしまう。その一瞬の隙を突いて、古我知さんは持っていたピストルの銃身で彼女を殴りつけた。
うわぁ痛い！
「あううッ！」
救芽井は思わぬカウンターを喰らい、地べたにたたき付けられてしまう。ちょちょ、これってかなりマズイ状況なんじゃないか！？

「ようやく大人しくなってくれたね。さ、お父様とお母様のところに行こうか」
倒れた彼女の頭を踏み付けている古我知さんが、挑発的に笑っているのがわかる。顔こそ見えないが、声が物凄く得意げになっていたからだ。「どや顔」ならぬ「どや声」か。
「くッ……！　お父様達に怪我はさせていないでしょうね！？」
「もちろん。それに、記憶も消去していないねぇ。なにせ、まだ着鎧甲冑の全データを教えてもらってないから」
「私達は、あなたなんかに負けない……！　着鎧甲冑のテクノロジーを、兵器になんて使わせないッ！」
「わかってないねぇ、樋稟ちゃんは。この力を売り出せば、儲かるなんてものじゃない。世界の歴史に名を残すことだって出来るかもしれないんだよ？　日本の機動隊やレスキュー隊に採用してもらって、少数配備するだなんて味気ないとは思わないのかい？」
古我知さんはグリグリと救芽井の頭を踏みにじりながら、なにやら難しいことを詰問している。おぉ……まるで意味がわからんぞ。
「ううっ――名を残す、なんて夢想家もいいところです！　兵器の歴史に残る名前なんて、私はイヤッ！　お父様も、お母様も、おじいちゃんも、人を救うためにコレを造ったんだからッ！」
悲痛な叫び声を上げる救芽井。く、なんだか放っておけない事態になってきてない？　俺の良心という名の緊急警報が作動中なんですけど……。

「家族思いだねぇ……感動しちゃったよ、僕。じゃあ、せめて家族全員の記憶を均等に消してあげるよ。君だけがかすかに覚えていて、周りが君を忘れてる、なんて嫌だろう？」
「イ、イヤァァァッ！　そんなの、そんなのダメェェッ……！」
記憶を消す、という脅し文句が効いたのか、救芽井はかなり怯えている様子だった。「家族全員」てのが痛いんだろうな……きっと。
それにしても「記憶を消す」……ねぇ。こんな状況じゃなきゃ、

冗談だと笑い飛ばせるんだけど……。
「大丈夫大丈夫。全てが終わった頃には、僕は世界的な兵器開発者として歴史に名を残し、君達一家は「盗作」を企てた連中として刑務所の牢屋行きさ」
諭すような口調で話す古我知さんは、戦意を喪失したのかグッタリしている救芽井の頭を掴み上げ、彼女の顔を覗き込む。

「――じゃあ、行こうか。僕の成功のために」

そして、その一言と共に彼は救芽井を抱えてその場から立ち去――

「あー、ちょっとちょっと」

――るってところで、やってしまいましたよ。俺。
明らかに場違いな空気で、俺は道を尋ねるかのようなノリで古我知さんに話し掛けていた。向こうは二人とも俺を前にして固まっている。
たった今、ゴロマルさんを言い付けを思い出した俺も俺だけどさ……そんなにビックリしなくたっていいじゃないか。だってほら、ちょっと出遅れたらあのままゲームオーバーになってたような気がするし。

「……え？　変態……君？」
「だぁーくぁーるぁ！　俺は変態じゃないんだって！　いい加減勘弁してもらえないかね！」
あーもう、開口一番に変態呼ばわりとは血も涙もないな！　全く、ちょっとかわいそうだったから、助けてやろうって思ったらこれなんだから！
……って、今はそこじゃないっ！
「それからあんた！　古我知さんだっけ？　さっきから黙って聞いてりゃあ、勝手なことばかり口走りやがって！　手柄の横取りなんてお兄さん許しませんよ！　――多分俺の方が年下だけども！」
ビシィッ！　と「呪詛の伝導者」の厳ついボディを指差し、俺は無謀にも啖呵を切る。マスクを付けてるせいで表情は見えないけど、多分両方とも「お前は何を言ってるんだ」みたいな顔してるんだろうなぁ……。
しょうがないでしょ！？　カッコイイ登場の仕方なんて「咄嗟」には考えつかないんだから！

「……君は、樋稟ちゃんの知り合いかい？」
ドスの効いた低い声で、古我知さんが質問してくる。や、やべぇ、超こえぇ！
「お、おうとも！　早くその娘を放せ！　じゃなきゃ……」
「――じゃなきゃ？」
「ひゃ、１１０番するぞ！？」
うぎゃー！　カッコ悪ッ！？
ここまで威勢よく踏み込んでおきながら、肝心なところでお巡りさん召喚かよ！？　我ながら最低だ！　俺のバカ俺のバカ！　早くこの震えた手にあるケータイしまえっ！
「……ふーん。なるほど。樋稟ちゃん、運が良かったね」
ちくしょー、俺のバカ！　アホ！　チキン野郎！　こんな脅しで

悪の親玉が言うこと聞くわけ――あれ？

「きゃっ！」

「警察呼ばれちゃ敵わないからね。焦らず次の機会を待つよ」

「えっ？　……え？」

古我知さんは救芽井を俺の足元に投げ捨てると……

……帰っちゃった。

遂に俺もヒーローデビュー（笑）

「警察を呼ばれたら困る！？」

公園での乱闘の後、救芽井家に帰ってきた俺は意外な事実を知らされた。

救芽井家と「技術の解放を望む者達」の抗争に、警察の介入はタブーなのだそうだ。

救芽井の方はともかく、立派な兵器を抱えた「技術の解放を望む者達」が「警察呼ばれたら困る」って……悪の組織としてそれってどうなのよ。

今度はちゃんと椅子に座らせてもらい、俺は元の姿に戻った救芽井とゴロマルさんの話に応じる。

「剣一さんは『呪詛の伝導者』を最新鋭兵器として、世界の軍需企業に売り出したいだけなのよ。だから、その前に警察にマークされて身動きが取れなくなる事態を避けようとしてるの」

「だから俺が通報しようとしたら、あっさり逃げちまったのか……じゃあさ、なんでこっちから警察に相談しないんだ？　人質取られてるからなのか？」

デリカシーのない質問かも知れないが、正直気になって仕方がない。この一件が片付かないうちは、おちおち受験勉強もしていられないだろう。

「それは違うぞい。剣一は着鎧甲冑のデータを元に『呪詛の伝導者』を造ったが、そのデータ自体も完全なものではないんじゃ。奴はより完璧な兵器を造るために、息子夫婦をさらった……じゃから、警察を呼ぼうが呼ぶまいが、奴が息子達からデータを聞き出すまでは余計な真似は出来ないんじゃよ」

「だったら……！」

「……でも、私達も警察には頼れない。もし警察にこの件が知れたら、どちらも不利になってしまうのよ」

やるせない顔をして、救芽井は俯いてしまう。そうしたいのはやまやまだけど、って顔してるなぁ。

「どういうこった？」

「強引な手段だったとは言え、私達の造ったスーツが兵器に利用されようとしているのは事実よ。警察に助けを求めたら、『解放を望む者達』は簡単に解体できるけど、私達のしてきたことまで危険視されるかも知れないのよ」

「そうなればマスコミにも知れて原因を追及されかねんし、結果としてレスキュースーツとしての採用が認められなくなる可能性があるのじゃ。兵器に使われるような危ない技術なんぞ使えるか、とな」

……なんとまぁ、せちがらい事情があったもんだ。それで、警察は当てに出来ないってことになるのか。

「でも……それじゃあこれからどうするんだ？　さっきの戦いを見る限りだと、普通にやって勝てる相手だとは思えないんだけど。それに、戦える人が女の子だけってのもなぁ」

「それなんじゃが――話があるんじゃ。龍太君」

「……え？」

薄暗く、冷たい空間をスポットライトが照らす。その光の中に、俺は連れ込まれていた。

――「腕輪型着鎧装置」を付けて。

「なんだか、ますますややこしいことになってるなぁ……」

『ぶつくさ言わない！　早く着鎧しなさい！』
ブレスレットに取り付けられている通信機から、救芽井の叱責が響いて来る。うぅ、耳が痛い……。
それから、どうやら「救済の先駆者」に変身することは「着鎧」って言うらしいな。

ゴロマルさんの頼みと言うから何かと思えば、いつの間にか救芽井家の地下室まで連行されてしまっていた。なんで一軒家にこんなもんがあるんだよ……まさか造ったのか？
『ちなみに、その秘密特訓部屋はわしが造ったのじゃ。どうじゃ、イカしておろう？』
やっぱりか。でも特訓部屋にしちゃ何もなくて、なんだか寂れてるぞ……よっぽど使う機会がなかったんだろうな。
それから、この場に二人の姿はない。リビングにあるコンピュータから、俺の状況をモニターしてるのだそうだ。

『よいか？　これから君には鹵獲（ろかく）した「解放の先導者」と一対一で戦ってもらう。先程話したとは思うが、これは君自身のためでもあるのだからな』
「わかってるよ。さっさと始めてくれっ！」
あーもう、なんでこんなことになっちゃったんだか。
……まぁ、これは俺が古我知さんに声を掛けちまったせいなんだし、致し方ないのかもな。

どうやら、公園の一件のせいで俺までもが「技術の解放を望む者達」のターゲットに入れられちまったらしい。
向こうは死人や行方不明者を出して、警察沙汰になるのは防ぎたいのだから、別に捕まっても命は取られない――とのことだが、代わりに自分達と関わった記憶の一切を消してしまうのだという。
しかも、その余波でそれ以前の記憶まで持っていかれる危険性ま

であるとか。正直、それは俺にとっての死活問題になりかねん！
この数ヶ月、なけなしの脳みそをフル回転させて励んだ受験勉強。その努力の結晶を、わけのわからんサイエンス集団に掻っ攫われるなんて御免だ！

――ということで、俺はいざ「技術の解放を望む者達」に狙われても自分の身を守れるようにと、救芽井も学んだという「対『解放の先導者』用格闘術」の訓練を受ける羽目になったわけだ。今回は、そのために「解放の先導者」の強さをまず知っておくことが目的らしいのだが。
しかし、「格闘術」かぁ……。残念ながら、俺には本格的に格闘技を学んだ経験がない。せいぜい、少林寺拳法（しょうりんじけんぽう）を嗜んでる兄貴から「申し訳程度」の護身術を教わってるくらいだ。
ケンカだってろくにしたことがないんだぞ。こんな俺に、なにをやれってんだかな……。

『何をボサッとしてるの、変態君！　「解放の先導者」が来るわよ！』
自分の無力さに嘆息してる暇もなく、向かいの扉からおっかない顔をした機械人形が、フラフラと這い出して来る。うげぇ、人間じゃない分余計に気味が悪いなぁ～。

「やるしかないな……よーし、着鎧甲冑ッ！」
俺は「腕輪型着鎧装置」にあるマイクに、勢いよく音声を入力する。
すると、目の前が真っ白な光に覆われ――気がつけば、俺は「救済の先駆者」の姿に成り果てていた。昨日まで、この姿をテレビや新聞で眺めてるだけだったのが嘘みたいだな……。できるだけ全身を見渡してみると、スーツが俺の体に合った形になってるのがわかる。

これが現実であると確認するために、俺は機械の鎧に包まれた両手で、頬を叩いてみる。微妙に衝撃は感じるけど……全然痛くない。
改めて着鎧甲冑の凄さに感心していると、『実戦でそんなことしてる暇なんてないわよ！』と救芽井に怒られてしまった。あぁそうだった、俺って今戦わなくちゃいけないんだっけ。

実戦を演出するためなのか、「解放の先導者」との戦いはゴングもなしに始まった。姿を見せるなり、奴はいきなり襲い掛かって来たのだ。
「解放の先導者」は両手を広げて、覆いかぶさるように迫って来る。それに対して、俺は両腕で頭を守るようにしながら、右足の膝を上げた。少林寺拳法で言うところの、「待ち蹴（げり）」の体勢だ。
相手が仕掛ける瞬間、こっちから蹴りを決めて距離を取る――言うなれば、「カウンター」の技だ。
少林寺拳法には「守主攻従（しゅしゅこうじゅう）」という、守りを第一にした原則ってものがある。自分からガンガン仕掛けるやり方は、俺には合わないってことだ。

「はッ！」
早すぎればかわされ、遅すぎれば攻撃を喰らう。そんな微妙なタイミングで、俺は短い気合いの声と共に、上げた膝を伸ばして蹴りを放った。
金属同士が激しく接触する音が鳴り響き、奴の突進が止まる。や、やった！　決まったぞ！
『……ほほぉ』
通信機越しに、ゴロマルさんの感嘆の声が聞こえて来る。どやっ！　兄貴仕込みの蹴りの味はっ！
……などと喜ぶ暇もなく、再び奴は俺に向かって来た。おいおい、

一応みぞおちは狙ったはずだぞ！？　もう少し痛みに悶えてもいいんじゃないか！？

「――くそッ、なら！」

でも、今は焦ってる場合じゃない。

俺は二、三歩距離を取り、今度は左足の膝を思い切り上げる。さらに、その向きを右斜めに曲げた。

空手にもある、人間の顎にある急所「三日月（みかづき）」を狙い撃ちする「三日月蹴り」だ。顎の横を薙ぎ払うように蹴る技なのだが、これは急所を狙うというだけあって危険なものでもある。

だけど、相手は人間じゃない。人間みたいに動くだけの、機動兵器に過ぎない！

「だああッ！」

スパッと振り抜かれた俺の蹴りが、奴の顎を掠めていく。そして機械人形の鉄の首は、関節技でも決められたかのように、グキッとひん曲がってしまった。

うーむ、後味は悪いが……これならダウンは必至だろう。初陣は白星で確定だ！

と、思っていたのに。

「う、嘘ッ！？」

奴は何事もなかったかのように、ガシャリと首を元に戻してしまった。そして、指先から鋭利な爪を出したり、胸から機銃のようなものをガチョンと出現させたりして来た！

ちょっと待て、お前それでも人間か！？

――あ。

――人間じゃ、ありませんでしたね……。

ぴぎゃー。

いざ名誉挽回！　……させて下さいな

結局、あの後は散々だった。

爪で引っ掻かれるわ、機銃で蜂の巣にされるわ。しまいには気を失ってしまい、気がつけばリビングのソファーに寝そべっていたのだ。

当然、救芽井さんはお怒り。両親が手塩に掛けて作り上げた「救済の先駆者」を傷物にされたんだから、当たり前か……。

「全く！　いくら初めてだったからって、たった一体の『解放の先導者』に手も足も出ないなんて！　それでも男！？」

「男だからって皆が皆強いわけでもないだろぅ……。だいたい、なんでわざわざ俺を鍛えなくちゃいけないんだよ。お前が古我知さんに勝てる作戦を立てれば済む話じゃないのか？」

酷い言い草の救芽井に対し、俺はちょっとばかり拗ねた態度になる。

考えてみれば、俺が狙われているからといって、必ずしも俺自身が着鎧して戦わなくちゃいけないことにはならないはず。むしろ、俺を巻き込んだ形になる救芽井側が責任を持って、護衛するのが筋じゃないのか？　情けないかも知れないが、こっちの着鎧甲冑が救芽井の持つ「救済の先駆者」しかない以上、俺が生身の状態で「解放の先導者」に出くわしたって敵いっこないのは一緒なんだし。

いちいち素人をしごいて戦えるようにするくらいなら、足手まといをほったらかして打開策を探す方が建設的な気がする。うぅ、自分で言ってて悲しくなってきたぞ……。

俺が抗議の声を上げると、彼女はバツが悪そうに目を背けた。気のせいか、その頬はほんのりと赤みを帯びている……ように見える。

「そ……そんなの簡単に行かないわよ！　それに、お、男の方が力が強いんだから、鍛えさえすれば効果的かも知れないじゃない！？」
しどろもどろしつつも、俺の前で腕を組み、仁王立ちする彼女。おぉ、けしからん程のボインが寄せて上げられ、揺れておる……。
「ご両親の助手とかやってた天才少女にしちゃあ、ずいぶんと曖昧な返事だなぁ。結局のところ、俺をおちょくりたかっただけなんじゃないか？」
「違うわよ！　そんなことのために、あなたに――あなたなんかに、『救済の先駆者』を貸すと思う！？」
俺が皮肉っぽく尋ねると、今度はキッパリとした態度で否定された。その表情には、「先程の発言を許さない」という強い意思表示がなされている。
自分の本気を否定されたような……そんな顔だ。
「そんな言い方は二度としないで！　私は、私は真面目にっ……！」
「真面目に？」
「も、もう、知らない！　変態君のバカッ！」
ぐはぁ、「変態」と「バカ」の二重心理攻撃がぁ……。
精神を撃ち抜かれ、ショックに襲われた俺はソファーから転落する。そんな俺を一瞥した救芽井は、顔をかすかに赤らめつつ「フンッ！」と鼻を鳴らして去ってしまった。

数分の回復期間を経て、なんとか心理的ダメージから立ち直った俺は、パソコンに向かって黙々と何かの作業をしていたゴロマルさんを見つける。その傍らには、何かのチューブで繋がれた「腕輪型着鎧装置」が伺える。
あのパソコンを使って、彼は事件や事故を迅速に救芽井に知らせて、出動を促したりしているらしい。今は俺が傷つけてしまった「救済の先駆者」を修理しているのだという。
「君も苦労しとるのぅ」

「……どーも」
顔を合わせずキーボードを打ちながら、ゴロマルさんは呆れたような声で俺を労う。気に掛けてくれるのは嬉しいんだけど、巻き込んだのはあんた達ですからね？
去年までの冬休みならいざ知らず、受験シーズンのタイミングで漫画みたいな世界観に連れ込まないで欲しかったなぁ。せめて春休みまで「技術の解放を望む者達」には大人しくしてもらいたかった……。

「はぁ～……」
思いっ切りうなだれながら、俺は窓の外から近所の様子を伺う。
そこでは、小さな子供がお父さんやお母さんに囲まれ、にこやかにクリスマスツリーの飾り付けに励んでいる姿があった。それに、お熱いカップルが住宅街を闊歩している様子も伺える。
そういえば、もうじきクリスマス……なんだっけ。

――何がクリスマスじゃあい！　ちくしょおおおお！　俺は恋人作ってデートどころか、初対面のお隣りさんに「変態」呼ばわりだよッ！
「……なにしとるんじゃ？」
気がつけば、俺は窓にベットリと張り付いて啜り泣いていたらしい。ゴロマルさんの哀れむような視線が痛い……。

「樋稟にも困ったもんじゃ。君を過剰なまでに意識してしまったばっかりにのぅ」
顔を赤らめつつ、イライラした表情で床をトントンと蹴っている救芽井。そんな彼女の様子を、ゴロマルさんは心配そうに見つめている。
しかし、イマイチわからない。俺を意識してるってだけで、こんな面倒事の渦中に人を叩き込むのかよ？

「それって、俺が裸見ちまったせいか？」
「じゃな」
じゃなって……そんなストレートに肯定しなくたっていいじゃないかぁ。確かに悪いのは俺だろうけど、一応は事故なんだしぃ……。
「ああなった以上、救芽井は君に望むしかなかったんじゃろうな」
「何を？」
俺が尋ねてみると、ゴロマルさんは達者な髭を撫で回しながら、いたずらっぽく笑う。
「王子様じゃよ」
「――は？」

翌日。
いろいろと衝撃的過ぎる夜を終え、朝日が真っ白な雪を輝かしく照らす頃。
俺はお隣りさんの女の子――救芽井と一緒に、町を歩くことになっていた。
夕べにゴロマルさんに言われたことが、全ての始まりだった。昨晩の悪夢のようなやり取りが、ついさっきのことのように思い出される……。
「樋稟は息子夫婦の夢のために、正義の味方となってこの町を守っておるが……あの娘自身としては、本当はそんな王子様のような存在に救われる、『お姫様』になりたかったのじゃよ」

「ちょっと待った、なんでそれで俺が王子様……もといヒーローにならなくちゃいけないんだ？」
「君が樋稟にとっての、初めての『男』だったからじゃな。自分にとっての『王子様』がするようなことを、それまでに必要な過程をすっ飛ばして実行してしまった君に、相応の責任を取ってほしかったのじゃろう」
「それで自分を守れるくらいには強くなれ――っていう理屈に発展したのか？　無茶苦茶だな……」
「夢見る女の子というのは、そういうものらしいからの」

――というわけで、俺はメルヘンチックな夢の道を絶賛爆進中の救芽井さんにお応えして、彼女を守るヒーローを目指すことを余儀なくされてしまったわけだ。
朝の九時に待ち合わせていた俺は、十分前には既に救芽井家の前まで向かおうとしていた……のだが、彼女はそれよりも早く家を出て俺を待っていた。
「来たわね。いい！？　自分の身も守れない一般人のあなたを、みすみす『技術の解放を望む者達』の脅威に晒さないための護衛任務なんだからね！？　勝手に私から離れちゃダメよ！」
「……！」
そこで俺は不覚にも、赤いトレンチコートにミニスカートという、救芽井の女の子らしい格好に思わず目を奪われてしまう。
茶髪のショートと凛々しい目鼻立ちが合わさって、大人っぽさと愛らしさが共存しているかのような、そんなアンバランスな魅力が保持されていた。
それが意識的なものなのかはわからないが、少なくとも俺と同い年のようには、到底思えない風格がある。
「へいへい」
そんな心の（やましい）動揺を気づかれまいと、俺は目を背けてわざとめんどくさそうに返事する。すると、向こうはムッとなって

眉を吊り上げる。
「あと念を押して言うけど――これはデートじゃないんだからねっ！？」
「わかってるよ……」
ものすごく顔を真っ赤にして、救芽井は俺を威嚇するかのように、思い切り指差して来る。ここまで警戒されてるのかと思うと、心がえぐられるようだ……。

やっぱり、俺って嫌われてるんだなぁ～。彼女と対話する度に、いちいち思い知らされる。
初対面がマズ過ぎたってのもあるんだろうけど、彼女が男をろくに知らなかったっていうのが何より痛かったんだと思う。そりゃあ、初めて見た同年代の男にいきなり裸を見られちゃあ、ビクビクもしちゃうだろう……。
だけど、このままじゃいけないってのは確かだ。この娘の王子様になってあげる――なんてのは、俺みたいなジャガイモ男には似つかわしくなさ過ぎるけど……それでも、出来うる限りの責任は取らなくてはなるまい。
そのためにも、そして俺自身の名誉のためにも、「変態」呼ばわりからは必ず脱却しなくては！

「な、なぁ救芽井？　まずは仲直りから始めようぜ。とりあえず俺のことは、ちゃんと一煉寺って――」
「さぁ！　まずは昨日火事が起きた商店街のパトロールね。行くわよ変態君！」
俺の名誉挽回への第一歩をアッサリと踏みにじり、彼女は茫然としている俺の手を引きながら、ずんずんと進んでいく。
あうぅ、前途多難ってレベルじゃねーぞ……。

こんなデートは絶対おかしいよ

夕べ、火災が起きていたという商店街。その現場には、警察やら野次馬やらがあちこちうろついていた。

俺は若干黒焦げになってしまった建物を見上げつつ、真剣な眼差しでそれを眺める救芽井の様子を、チラチラと横目で伺う。

ブスッとした表情で腕を組む彼女の手首には、一晩で修理を終えていた「腕輪型着鎧装置」がある。ホッ、どうやら簡単に直ったみたいで一安心だ。俺のせいで使い物にならなくなったりしたら、コトだもんな。

「くっ……『技術の解放を望む者達』……！」

苦虫を噛み潰したような顔で、彼女は建物から目を離さない。自分が解決させた後のことが気になって、ここに来たんだろうなぁ。

昨日の夜中に起きた火災で、噂のスーパーヒロイン――つまり彼女が着鎧する「救済の先駆者」が活躍していたことは、今朝の朝刊にしっかり取り上げられていた。

「巷で噂のスーパーヒロイン、またまた大活躍！」……という見出しはもう見慣れたつもりでいたのだが、今になって読んでみると、友達が新聞に載ったかのような感慨深さを感じてしまう。いや、別に彼女とは仲良くないんだけどね。それどころか――

「ちょ、なにジロジロ見てるのよ！　こんなところで、いやらしいわよ変態君！」

――ご覧の有様だし。

道行く人々の雑談に耳を傾けてみれば、皆口々に救芽井のことを

噂してるのがわかる。まさか巷で噂のスーパーヒロインが、俺の隣でイラついてるアブない美少女だとは夢にも思うまい……。
頭脳明晰、容姿端麗、身体能力抜群……なのは確かなんだし、その辺が完璧なのはわかるんだけど――ただ性格が、ちょっとね。
救芽井は胸を両腕で隠しながら、キツい視線を送って来る。俺が胸をガン見してると思ってるらしい。――おいおい、確かにけしからんおっぱいなのは認めるが、そこまでしなくたって見えるわけないだろうが……。
しかし、コートの上からでもわかる程の大きさとは――思わず腕を上げ下げして「おっぱい！　おっぱい！」と歓喜したくなりそうだ。

「全く……。もう、行くわよ！　迷子になっても知らないからっ！」
俺に見られてることが堪えられないのか、彼女はいきなり速いペースで歩き出してしまった。ちょっと待て、自分から離れるなとか言っといて、それはないんじゃないの？
救芽井は置いてけぼりな俺を放置して、ツカツカと先へ進んでいく。クリスマス前で賑わってる今の商店街は、人通りが多い。このままじゃあ彼女の言う通り、はぐれて迷子になっちまう！
「ちょ、待ってくれよぉ！」
俺は火事の跡を一瞬見遣ってから、すぐさま彼女を追い掛けた。

――追い掛けたのだが。

「見失っちゃいました……」

はい、終了。

……って、人通りの多い時期に一人で飛び出すとか無情過ぎるだ

ろッ！　どうやって探すんだ？　この状況……。
「小さい町だから、いつもなら人通りなんてあってないようなものなのに。よりによってこの時期にとは……恐ろしい間の悪さだな」
この場に彼女がいないのをいいことに、俺は思いっ切りため息をつく。商店街に来る途中、昨日の散々な扱いに辟易していて「朝から辛気臭い顔しないッ！」と平手打ちを貰ったことがあるからな。今ぐらい（精神的に）一息ついてもバチは当たるまい。
……そういえば、救芽井はどこに行こうとしてたんだ？
ふと、それが気になって、彼女が向かっていた方向を見つめていると――

――ぬいぐるみ屋が目に入った。
まさか、あそこに行きたかったとか？　町の平和を守る、正義の味方が？
いやいや、ないない！　だって、あの生真面目スパルタおっぱい星人だぞ！？　それに、今日は商店街の「パトロール」だって本人も言ってたし！
……でも、もしかしたら、ついでに見て行きたかったのかも知れないな。それに、二学期の終わりにこっちに引っ越してきたんだから、この町をよく知らないはず。ひょっとしたら、パトロールを兼ねて、この辺りを散歩してみたかったんじゃあ……？
正義の味方だろうとボインちゃんだろうと、俺と同じ年頃の女の子には違いないんだろうし。うーん、わからなくなってきたぞ。

――あれ？　ちょっと待てよ……。
あの娘って、この町に来て日が浅いはず。
最近来たんだから、この時期は人通りがやたら多いってことも、多分知らない。

地元の人間（ここでは俺）と離れて、単独行動。

そして、なかなか帰ってこない。

……。

もしかしたら……いや、多分そうだ。

俺は迷わず、商店街の近くのとある場所へ向かった。救芽井がそこにいる、と確信して。

その確信は、やはり的中していた。

商店街の傍にある、小さな交番。そこには、真っ赤な顔で俯くスーパーヒロインの姿があったのだ。

「お、おそ、遅いわよ変態君！　迷子になってたらどうしようって心配してたのよッ！？」

「あー……いや、どの口が言うんだ？」

ろくにこの町を知らない奴が、知ってる奴のもとを離れて、人通りの多い時期にうろついてたら、そりゃ迷うわッ！

当の迷子の子猫ちゃんは、さも自分は迷ってなんかいないと言わんばかりに、ふくよかな胸を張ってるし……おぉ、揺れてる揺れてる。

ゴ、ゴホン。とりあえず、目の保養にはなったし、今回のところは大目に見てやるか。知らない町での暮らしで、不自由が多いのは仕方ないんだし。

「お、迎えの人かい？　……って、龍太君じゃないか！　お兄さんは元気にしてるかい？」

「あ、どうも。ええ、今頃は就活でバタバタしてるでしょうね」

「ハッハッハ！　出来れば龍亮君にも警察になってもらいたいなぁ

！　なにしろ、交番勤務は大変でねぇ。とにかく人手が欲しいんだよ」
「兄ですか？　あいつはわりかしフリーダムですから、多分向いてないですよ」
　迷子になっていた救芽井を預かってくれていたのは、顔見知りの若いお巡りさんだった。松霧町自体が小さな町だから、俺はここの知り合いが結構多い。ゴロマルさんと知り合ったのも、彼ら一家がこの町に引っ越してきてすぐのことだった。救芽井と会ったのは昨日が初めてだが。
「そうかぁ……にしても、君も隅に置けなくなったねぇ！　こんな超プリティな彼女捕まえるなんて！」
「ちょ、声が大きいですって！　それに彼女じゃ――」
「断ッッッじて違いますッ！　誰がこんなドッ変態君ッ！」
　軽く冷やかすお巡りさんを止めようとした時。これ以上は生物学的に不可能というくらいに、顔を真っ赤にした救芽井の怒号が、俺達二人の鼓膜に突き刺さる！　キーンと来る聴覚の痛みに、俺もお巡りさんも思わず尻餅をついた。
　ひぎぃ、ついに「ド変態」にランクアップかよぅ……。
「か、彼女じゃない？　それじゃあ誰だい？　こんな綺麗な娘、なかなかいないし……」
「ただのご近所さんですよぉ……！」
　耳を抑えながら、俺は消え入りそうな声で必死に弁明する。
　敢えて、「最近引っ越してきたお隣りさん」とは言わない。口にすれば、例の迷惑発光の元凶と知られ、彼女がクレームを受けてしまうからだ。夕べ、俺がそうしたように。
　そうなれば、「変態」からの脱却が不可能になってしまうだろう。

彼女達の都合上、光を止めることは出来ないし、それならクレームの末に、町を追い出されることになりかねない。
発光に悩まされることはなくなるが、嫌われたままで別れるのは後味が悪すぎる。そんなの、俺は絶対に嫌だ。
だからこそ、俺は彼女に応えなきゃいけない。どうせ近所付き合いするんなら、仲良しな方がいいに決まってるんだから。

「そ、そうか……ちょっと残念だよ……」
「なにがですか、もうッ……！」
聴覚をやられ、悶絶必至な俺達。その様子を、救芽井は拗ねた顔で見下ろしていた。
「し、信じられない！　何が彼女よ……もうッ！　とにかく、さっさと行くわよ変態君ッ！」

彼女は俺の腕を引っつかみ、ズルズルと引きずっていく。俺は強制連行されつつ、既にグロッキーだったお巡りさんに別れを告げた。

それから商店街に戻ってきた救芽井は、またも同じ方向へ向かおうとしていた。彼女の目線を追っていると、やはりぬいぐるみ屋に注目しているのがわかる。
やっぱり女の子だなぁ……。
「な、なによ？」
いつの間にか、彼女の顔をまじまじと見ていたらしい。俺はそそくさと視線を正面に戻し、話題を出すことにした。
「何でも。それより、さっきの焼け跡以外にどこを『パトロール』するんだ？」
「う……！」
俺が振った質問に、彼女は言葉を詰まらせた。ははーん、さては真面目な「パトロール」は、火事現場のことくらいだったんだな。

「ついで」どころか、散歩の方もかなり重要だったらしい。

「……あ。そういえば、あんたってあんまりこの辺には来たことないのか？」

「しょ、しょうがないでしょ！？　出動時以外は、専ら地下室で訓練してるだけだったんだし……」

ちょっとかわいそうな気がしたので、別の質問にしてみる。すると、今度は割とまともな答えが返ってきた。

――なるほど、あの薄暗い部屋にねぇ。道理で、お隣りさんなのに昨日まで一度も顔を会わさなかったわけだ。

にしても、この反応……よっぽど、迷子になったことを気にしてるんだな。同じ失敗をしたくないのか、微妙に俺の袖を掴んでるのがわかる。

でも、プライドに障るのかしっかりとは掴んでない。指先で、ちょいと摘んでる感じだ。

表情も、「仕方なくよ、仕方なく！」といいたげ。見ていて、正直めちゃくちゃじれったい。

「だーもう、まどろっこしいなぁ」

俺は間の抜けた声で、一瞬彼女の摘んでいる手を払い――その手をしっかりと掴んだ。

「き、きゃあっ！？　なにするのよ変態君ッ！」

「――ぬいぐるみ屋！」

「……え？」

「行きたいんだろ？　一緒に見てやるから……離すな」

怒られるのは覚悟してたけど、やっぱりハッキリと言ってしまった方が気分がいい。救芽井はボッと顔を赤くして抵抗していたものの、やがてシュルシュルと大人しくなり、俺の言葉に小さく頷くようになった。

よ、よかったぁ～……。これで「はぁ？　なに勘違いしてんの？」とか言われたらトラウマもんだったわ。まぁ、それなりに確信はあったんだけどね。

その後、ガラス張りの奥に陳列された、可愛らしいウサギやクマのぬいぐるみに夢中になる彼女の姿は、かなり意外だった。

その様子は、無邪気にぬいぐるみと戯れたがる、小学生の女の子と大差ない。いつもの強張った顔とは全く違う、なんだか「自然」な感じの笑顔を見ることが出来た。

――そういえば、救芽井の笑顔なんて初めて見たな……。スッゴく可愛いし、綺麗だ。改めて、彼女がアイドル顔負けの美少女なんだって事実を思い知らされる。

「ねぇ、変態君」

嬉々とした面持ちで、救芽井が話し掛けて来る。笑顔で変態呼ばわりは、なんか今まで以上に突き刺さる……。

「な、なんだよ？」

「ぬいぐるみ、どれがいいって思う？」

「はっ？」

妙な質問に目を丸くする俺に対し、救芽井はフッと微笑んだ。なんだこの笑顔。天使か？

「今日買うぬいぐるみ。ご褒美に選ばせてあげるわ」

「なん……だと」

マズい！　俺はぬいぐるみを選別するスキルなんてカケラも持ち合わせていないというのに！

し、しかしここで失敗したら、「変態」呼ばわりの汚名返上が遠退いてしまうッ……！

「うーん、参ったな……俺、人形なんてちんぷんかんぷんだし」

「別に何でもいいわよ。あなたが可愛いって思うものを選んで」

「そ、そうか？　だったら――」

直感で、行くしかない。
俺は腹を括り、一番それっぽいのを指差した。
「――この、緑のリボンのウサギ、かな」
俺が選んだぬいぐるみ。
それは、耳の辺りに大きな緑色のリボンを付けた、デカいウサギだった。
「あ、ホントだ！　これ可愛いっ！」
救芽井は昨日までとは想像もつかないテンションで喜び、ガラスをバンバンと叩く。おい、可愛いのはわかったから落ち着きなさい！
「でも、どうしてこれがいいの？」
彼女はようやく叩くのをやめたかと思うと、今度は真ん丸な瞳で俺を見上げて尋ねてきた。あの鋭い眼光はどこへ！？
「ん……このウサギの白がさ、なんかあんたの肌みたいで綺麗に映ったんだ。それに、リボンが緑なのも『救済の先駆者』っぽくていいだろう？」
と、俺はつい思ったままの理由を述べてしまった。
――あああ、マズい！　マズいぞ！　リボンはともかく、「肌」はマズい！　イケメンならまだしも、ブサメン予備軍の俺がそんなこと口走ったら犯罪にしかならない！　「ド変態」からのさらなるランクアップがきちゃうううう！
「～～っ！」
救芽井は目をさらに丸くして、赤い顔のまま俯いてしまった。声にならない叫び声を上げて。
「あ……」
そして、なにかを言おうと口を開いた！

いやあああ！　やめてえええ！　変態以上なのはわかったから、もう何も言わないでえええェッ！

そして、俺が耳を塞ごうとした時――

「……ありがと」

――信じがたい台詞を、彼女は言い放っていた。

その後、俺達は買ったぬいぐるみを抱えて昼間には帰路についていたのだが、その間一言も言葉を交わさなかった。

行きの時は、昨日のボロ負けのことでガミガミ怒られながらも、いろいろなことを教えてくれていたのだが。

――彼女によれば、商店街の火災も「技術の解放を望む者達」の仕業らしい。俺は拝見する前に気絶してしまったのだが、「解放の先導者」には火炎放射器まで組み込まれているのだとか。恐ろし過ぎる……。

救芽井は顔を赤くして目を合わせてくれないので、俺はこうして会話が出来ない代わりに、今朝の話題を思い起こして帰るまでの時間を潰すしかなかった。

にしても、あの火事が「技術の解放を望む者達」の仕組んだことだったとはね……。死人も怪我人も出なかったから良かったものの、こりゃあ大変なことになってきたもんだ。

救芽井が言うには、人殺しを目的としない「技術の解放を望む者達」が火事を起こしたのは、「救済の先駆者」をおびき寄せて、運動能力のデータを調べるのが目的だった……という可能性が高いら

しい。向こうは、救芽井が死人を出さないようにすることも計算済みだったってことか。
それに「偶然、火が油に引火した」と思わせるように火炎放射器を使えば、「解放の先導者」の存在を知らない人々は「放火」だとは思わない。だから、仮に死人が出たとしても「技術の解放を望む者達」が世間に取り沙汰されることもない。
――なんとも、セコいことをするもんだなぁ。さすが悪の秘密結社（ただし人間は一人だけ）。

ところで、そういうハードな話を朝っぱらからする救芽井だったけど、蓋を開けてみれば結構女の子らしいところもあるじゃないか。
ちゃんと彼女の事情に付き合ってあげれば、なんとかなるかも知れないな。

そんな淡い期待を抱いていると、救芽井家が見えてきた。さぁて！　ぬいぐるみを家に運んだら、俺はいい加減勉強しないと！「救済の先駆者」の訓練も大事だが、それにうつつを抜かして入試に落ちたくもないからな。

――って、あれ？　俺ん家の前に、誰かいる……。

よく見てみると、救芽井家の隣にある俺の家に、人影が見えていた。兄貴か？　でも、今は就職の説明会に行ってる頃だし……郵便にも見えないな。あのシルエット――女の子？

――あ、なんか見つかった。つーか、こっちに走ってきた。

「一煉寺！？　あんた何しとん？」

俺の姿を見つけるなり、息せき切らして走ってきた彼女は……俺

の顔見知りだった。
「へ、変態君？　この娘――誰？」
いきなり登場してきた第三者に、救芽井はかなりテンパっている。
彼女の口から飛び出してきた「変態」というワードに眉を潜めつつ、例の女の子は俺に詰め寄ってきた。

「い、一煉寺！　あんた受験やのに、何をほっつき歩いとんや！　あと、『変態』って何や！？　この娘、誰やっ！？」

あー……まさか、この期に及んで、この娘に見られるとはぁ。めんどくさいことになってきやがったなぁ……トホホ。

――この女の子の名前は、矢村賀織（やむらかおり）。
俺のクラスメートにして、唯一の「女友達」だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4865z/

着鎧甲冑ヒルフェマン

2011年12月26日23時51分発行